

[14] 文學研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2557052>

出版情報：文學研究. 14, 1935-12-30. Faculty of Literature, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

雜錄

Die ästhetische Wirklichkeit von Hermann Nohl. Frankfurt a. m. 1935.

ゲッティンゲン大學の Nohl の講義は直截平明で獨乙の學生間にも非常に喜ばれてゐるのであるが、同時にかれの著書も煩雜な用語をさけてできる丈平易に讀ませる様にしてある。この書は本年同時に出版された 'Einführung in die Philosophie' におけるかれの哲學上の立場を美學にまで延長させたものである。

この書のとり扱ふ時代はルネッサンスから十九世紀の終りまでである。その特色は、「哲學入門」におけると同様に歴史的發展の途上に現はれて來る諸々の立場をその相對的な正しきにおいて認め、而してそれをより高い統一の中にとり入れる事にある。美學的現實の中から各人は或る一面をとリあげる。そして或人は創作家から、或人は觀賞者から、或人はそれ自身存在する藝術作品から出發し、かくして美學上の理論が夫々分れて來るのである。更に藝術自身の中においても同時に色々の機能がある。すなはち表現として、現實描寫として、裝飾若くは完成として、象徴的説明としての機能等がこれである。理論はその一面を時に應じてとりあげるのであるが、眞の藝術作品の中にはかゝるすべての作品が同時に存在してゐなければならぬ。この書の中心をなす所は

かゝる藝術作品と世界觀との奥深い關係の探究にある。更に世界觀の相違は、人間生活の複雑な組立の各々の面をとリあぐるにしたがつて生ずるものであつて、その人間生活の緊張した對立、接觸が藝術作品に表はれて來るのである。「この緊張の構造の力學こそ……藝術作品の眞の内容である……」。各々の大建築物はその力學を、自己の中に客觀化してゐる所の性格の力學から得るのである。この對立の力學及びその結合の力學は我々が作品の形而上學的機構と呼ぶ所のものである。」

この書の功績は、「哲學入門」におけると同様に、種々の形をもつた無限の歴史的現實をとリあげ、しかもその無限の堆積の中にふみ迷ふ事なく、獨自の主張をうち立てた所にある。ただこゝには過去をして意味あらしめる所の未來を指す強い意志が缺けてはゐるが、とまれ歴史學派の代表作として推さるべきものであらう。(Die Literatur) (大山朴)

ハンス・ヨースト

本年度はじめて獨乙で「藝術及び學術に對する N.S.D.A.P.賞」といふのが設けられた。綱領によればそれは「國民社會主義的世界觀の形成に對して大なる貢獻をなしたるもの、又は將來においてかゝる業績を約束する」如き藝術家及び學者に對して奨學金の形式で年に貳萬マルクを分ち與へらるゝのである。本年度の受賞者は文學者のハンス・ヨーストと民族學者のハンス・ギュンテールと決定した。

ハンス・ヨーストといへば嘗て表現主義の華かなりし頃新進作家として活躍した人であつて、その戯曲「寂しき人」は我國に翻譯された事もあり、現在では獨乙文藝院長である。

かれは一八九〇年に生れ、はじめ醫學と哲學を修めた。文學に志したのは世界大戦によつて異常なショックをうけてからである。思想的にはストリンドベルク及びヴェーデキントの影響が強かつた。「若き人」(一九一六)、「寂しき人」(一九一七)等の初期の作においては革命的な表現主義者であつたが、後には次第にこの傾向から離れて行き、土、郷土、傳統の價値と美を強調し、獨乙精神を鼓吹し、世界大戦によつて荒廢した獨乙から新しい未來を創造する事に全精神を傾倒する様になつた。

「王」(一九二〇)といふ劇の初演に際してかれは次の様にいつてゐる。

「言葉といふ制限によつて我が民族の表現となる所の藝術を創造する爲に私はあらゆる限りの情熱をもつて精進しやう。言葉は素材ではなく、母なる大地であり、謂はゞ蒼穹である。

言葉への愛のみが故郷と祖國を開拓し、意識と精神を開拓する。かゝる愛のみが人間性との最後の對話において獨自の意義を獲得しうるのである。言葉は常に精神の化身であるが故に、この自覺的な愛なくては人類は肉體にも力にも負ける所があるのである。

精神は大地から汲みとられる、恰度金の様に。
私の大地は獨逸である。」

「國語に對する共通の愛は又祖國に對する共通の愛をよび覺す。」
「我々は我々の故郷と民族を愛せねばならない。」

獨逸精神はかれの創作の源泉であると同時にその目標である。こゝに我々はヒットレルの運動の精神と相通するものを見出す事が出来る。

かれは性格的に見て劇作家であり、事實かれの作品の大部分は劇である。かれは劇をもつて「迷へる、病める故郷の熱烈なる救濟者となる」べき手段と見るのである。

かれの演劇論は形式的にはギリシヤ演劇の復活である。先づかれは演劇を劇場から解放せん事を主張し更に合唱團の形而上學をもみとめた。かういふ風なかれの要求は今や野外劇「Himself」となつて實現された。勿論かゝる野外劇が從來の脚本を完全に演出する事は出来ず、藝術的に見ても劣つて居り、原始的である事は否めないが演劇が大眾の手にもどつた事は意義深い事である。

かれの近作にはアメリカ獨立戰爭を題材にした「トーマス・バイン」(一九二七年作。本年、すなはち一九三五年八月野外劇場にて上演された)、「シュラーゲテル」(一九三三年)などがある。

「シュラーゲテル」は一九二三年ルールの叛亂で處殺された獨逸の英雄レオ・シュラーゲテルを描いたものである。はじめは眞面目な國民經濟學者でアカデミックな市民であつたシュラーゲテルがいかにして暴徒となり、ルールの叛亂における「消極的抵抗」行動の熱狂者となつたかの過程が、ハンドリングによつてはななく、討論によつて示されてゐる。これは謂はゞ討論劇である。か

れはこれの中で新しい青年がその土地と民族に對する絶對的な意志をもつことの権利を示さうとした。(犬山朴)

關根秀雄氏譯

『モンテーニュ隨想錄』

モンテーニュの隨想錄が出た。全三卷、各卷六百餘頁の大冊である。

近時、多くの翻譯家の共同によつて成る所謂全集が少くないがあれには大きな危険が伴つてゐないであらうか。同じ一人の原作者の文章やその匂ひが、譯者によつて多少とも異り傳へられる患へはないであらうか。その意味で隨想錄の翻譯が關根教授一人の手に成つたことは、モンテーニュにとつても我々讀者にとつてもこの上ない幸であつたといはなければならぬ。而も教授は「はしがき」に記して、「もうかれこれ十年も昔に、私がこの翻譯に志したのは、専ら自身自家のためであつた。(中略)生れつき病弱で神經のか細い自分自身のために、また、不治の病患を背負うて、いはゞ人生の旅路にゆきなやんでゐた家族の一人のために、こゝに幸福と長壽の道を學ぼうとしたのが、抑々の始まりであつたのである。」といはれてゐる。この翻譯が、いかに周到な用意といかに深い愛とを以て續けられたものであるかは察するに難くない。

現代ドイツのフランス文學者として合名ある E. R. Curtius は

フランス文學の特質を語つて、「ドイツ文學が形而上學的なものに傾いてゐるとすれば、フランス文學は心理文學に傾いてゐる。」といひ、更につゞけて、「フランス文學は、人間についての決して盡きない談話である、フランス文學は、人間學の教程である」と喝破してゐる。(土方定一氏の譯による)。果してフランス文學が最も人間的な文學であるとするなら、そのフランス文學の中でも最も人間的なのはモラリストの文學であらう。換言すれば「人間學」は、バスカル、ラ・ロシュフルコー、ラ・ブリュイエール等々のモラリストによつて、最も深く最も熱心に追求されてゐるのではないか。然らばそれらのモラリストの父ともいふべきわがモンテーニュを讀むことは、フランス文學の最も特徴的な最も根本的な精神の一つに觸れることではなからうか。

モンテーニュ隨想錄のそれ自身の價値や面白さに就ては既に多くの人が語つてゐる。今や見事にわが國に移し植ゑられたモンテーニュが、祖國フランスに於てのやうに多くの喝仰者を獲、彼らに「徳と幸福」との道を教へるやうにと希つて、この紹介の筆を擱く。(東京、白水社、各卷定價四圓。)——大塚幸男——

ハーディの處女作？

今年(一九三五年)アメリカから *An Indiscretion in the Life of an Harless* / by Thomas Hardy / Hardy's "Lost Novel" / Now First Printed in America and Edited with Introduction and Notes / by Carl J. Weber / Roberts Professor of English

Literature in Colby College なる本が出版された。それが日本に於てもハーディ研究家に依つて取上げられ、問題とされるのは、失はれたとされてゐるハーディの處女作 *The Poor Man and the Lady* との關係に付つてである。その關係については藤井啓一氏の「Thomas Hardy 研究の新資料」(英語青年第七十四卷第四號)に精しい。私はそれをこゝに反復する氣は勿論ないが、要領だけ言へば、ハーディが一八六八年に *The Poor Man and the Lady* を出版しようとしたのが駄目になつた後、それを書き直して十年の後一八七八年アメリカの *The Modern Quarterly Magazine* に出した(尤もハーディ自身はそのことを記憶してゐなかつた、彼の夫人の著はしたハーディ傳にもこのことには言及されてないやうである)、それが今度新たにハーディ研究の一資料としてハーディ研究家ウィーバー氏に依つて世に出されたのである。

併し第一の問題はこれが眞にハーディが書いたものか否かと云ふことであらう。これが唯彼の所謂失はれた處女作と縁続きであると言ふだけでは何にもならないことになる。と言ふのはその處女作そのものは現存しない。或ひは少くとも出版されてゐず、我々はそれを直接に讀んで、兩者の關係を確かめることは出来な。唯その梗概だけはハーディの死後、彼の口から直接にそれを聞いたと言ふエドモンド・ゴスの談話があるのみである。(この梗概は日本では宮島新三郎「英國文藝印象記」一七〇頁—一八二頁に出てゐる。)梗概のみでは文藝作品として扱ふことは出来ず、従つてこのやうな骨抜き作品と比較することは、嚴密には永遠

に不可能である外はない。従つて我々はこの新たに出版された一つの作品に直接ぶつかるとより外に道はない。その結果は如何であるか。私はハーディのものとして断定したい氣がする。私はウィーバー氏の次の言葉は正しいと思ふ。「ウエセックス小説を前以つて六つか七つか知ることに依つてこの物語を讀む資格を得てゐる人々には、この初期の作品について何ら批評的解説を要しないであらう。それは徹頭徹尾眞のハーディらしさに貫かれてゐる、良き意味にても悪しき意味にても。そしてこれにハーディの名前が附せられてゐなかつたとしても、著者がハーディなることを確信出来るであらう。」従つて私はこれをハーディの書いた一つの文藝作品として取扱ふ。

「ある女相續人の生涯に於けるある無思慮」がハーディのものであるとする時、ハーディの全小説體系の中に在つてそれが如何なる立場に在るか、又その文學的價値如何、といふことが第二の問題となる。その前に便利の爲に大體の荒筋を記して置かうと思ふ。この作品は二部に分れてゐる。エグバートはウエセックスのある村の小學校教師だが、立派な教育を受けた青年である。同じ村の大地主の(一人)娘アレンヴェイル。エグバートがこの地主の娘の命を救ふことから、二人の間の交渉が始まる。その交渉はハーディ流に戀愛にまで到達する。娘の父親の地主は頑固な性格で若しも二人の交渉に氣付いたとしたならば、どんなことになるか分らない。常識的に言へば、この戀愛は結婚まで行く可能性はない。エグバートはその爲、ロンドンに出て成功し、再び村に歸つ

て娘の父親を説服する外に仕様はないと思ふ。でそのことを女に告げる。以上が第一部である。一部と二部との間には五年の年月が経過してゐる。その五年の間エグバートは懸命に文學修業をした、凡て女の爲に。小説家として稍々認められて来るが、女との通信が女の父親に依り斷たれてしまつた後は、女との消息が分らない。その中ロンドンで二人が會ふことになるが、女は彼を避けるやうな態度である。女が別の男と結婚することになつたのをエグバートは新聞で知り怒る。併し女は彼を實は愛してゐたので結婚式の日が来る前に彼の所に逃げて来る。二人は秘かに結婚する。結婚後數日たつて、女は父の所に許しを乞ひに赴いたまゝ病で倒れ、やがて、そこへ來たエグバートに看取られ乍ら死ぬ。

この小説も、程度の差はあるけれども、「ジュード」がハーディのある意味での自叙傳であると同じく、彼の自叙傳であると言つて良いと思ふ。又その中の人物の描寫がリアルでなく空中に浮遊するといつた感じのすることは確かである。エグバートにしてもミス・アレンヴィルにしてもまるで小供のやうであつて、迫力を持たない。唯自然及び村人を描く時のみは彼の筆は生々しく理解と自己投射を以てなしてゐること彼の凡ての小説に通じてゐる所である。それにも拘らず迫力に乏しいエグバートとミス・アレンヴィルが主人公となつてゐるのも、外の彼の作品の殆んど凡てに共通すると思ふ。又筋の上で「コインシデンスとアクシデンスとを用ひ過ぎてゐる」(ウィーバー)。例へば最後に女主人公を死なせてゐるが、それは一つのデウス・エクスマキナである。若しも

女主人公が死んで呉れなかつたならば、彼女の頑固な父親、父を思ふがエグバートをも愛する彼女、彼女を愛するが彼女の父には好感を持たないエグバート、この三人の關係は甚だ複雑となるに違ひない。だから彼女を殺すに如くはない、さうなれば彼女一人が後の二人にとつて問題である以上、彼女がなくなれば、結末は簡単に済むのである。かういふづるい手は古來秀れた文藝作家たちも用ひ來つた所であるが、今日の我々がそれを缺點とするのは結果が問題ではなく、その結果に到るプロセスにのみ問題があるからである。その外、金持と貧乏人との階級的對立、といふ觀念も現はれてゐる、このことは今我々の見ることの出來ぬ「貧乏人と貴婦人」が社會主義的なものであつたと傳へられるのと考へ合せて面白いと思ふ(「ジュード」にもさういふ氣持がある)、が唯それはイデアルなものとして、事實は他の作品と同じく戀愛と言ふものゝ中に塗り込められてしまつてゐる。

要約すると、この作品は後に出て来る彼の多くの小説のプロトタイプと認められると言ふ以外には別段の價値はなきやうである。併しハーディ研究家にとつては一つの貴重な研究資料になることは言ふを俟たない。

ウィーバー氏の編纂したこの本は、「ハーディの失はれたる小説」(一頁—二十頁)、「ある女相續人の生涯に於けるある無思慮」(二十一頁—四三頁)、「編者後記」(一四五頁—一四六頁)から成つてゐる。最初のもの、及び最後のものは、テクストの註と共に良心的なハーディ研究であるが、文學的な鑑賞と批評とに乏しいことを残念に思ふ。(一九三五・一一・二六・森岡榮)

Das gelehrte Teutschland oder Lexikon der jetzt lebenden
teutschen Schriftsteller. Angefangen von Georg Christoph
Hamberger, fortgesetzt von Johann Georg mausal, Dritte,
durchaus vermehrte und verbesserte Ausgabe. Lemgo, im
Verlage der Meyerschen Buchhandlung 1776.

この書は百六十年以前の獨逸に於ける各方面の著述家の人名辭典である、當時カントは五十の坂を越したばかりで、その三大批判の一も出して居らず、恐らく無名の大學教授であつたであらう。然るにゲーテはまだ三十に滿たない若年で、ゲッツ・フォン・ペルリヒンゲン、若きウエルテルの惱み等を著して獨乙文壇、否歐州文壇を震撼せしめてゐたのである。試みにゲーテの項を見

ると、
Götthe (Johann Wolfgang) フランクフルト・アム・マインの法學士、一七四九年八月二十八日同地に生る。作品、クローディウス・メードンに與へる戲詩、ライプツヒ一七六七年。新詩集、ブライトコップ作曲、一七六八年。ドイツ建築術について一七七二年。×××の牧師より××の新牧師に與ふる手紙、一七七三年。ゲッツ・フォン・ペルリヒンゲン、劇、ハンブルグ一七七三年、フランクフルト・アム・マイン一七七四年。獨乙氣質と藝術に關する書を發行、ハンブルグ一七七三年。シュヴァペンの田舎牧師の聖書に關する二つの質問、一七七三年。神の最も新しい啓示へのプロローグ、一七七四年。神々、英雄及びウ

イラント、狂言、カールスルーエ一七七四年、クラウイーゴ悲劇、ライプツヒ一七七四年。若きウエルテルの惱み、ライプツヒ一七七四年、第二版一七七五年。道德的—政治的人形劇、ライプツヒ及びフランクフルト一七七四年。ブラウトス以後の喜劇への興味、フランクフルト及びライプツヒ一七七四年。エルウインとエルミール、歌謠劇、フランクフルト一七七五年(はじめイリス誌上に掲載さる)。ペートウスとアリーア、藝術家譚詩、一七七五年。全集、一部及二部、ベルリン一七七五年。シュテルラ、愛する人の爲の五幕の劇、ベルリン一七七六年。

とある。しかしながらゲーテが世界の詩人ゲーテとなるであらう事を、そしてその死後百年尙炳として輝き續けるであらう事をその時の誰が思つて見ただらうか。

私はこの千四百頁を越える數千人の人名辭典を目の前にして時の推移について思ひを凝らす。そしてよどみに浮ぶうたかたの且つ消え且つむすぶ如き地上の生活が創造する藝術の永遠性について考へる。更に又今年發行になつた人名辭典を百年の後自ら見る事が出来たらいかなる感慨がわくだらうかと空想もして見るのである。(犬山村)